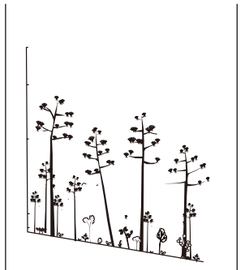
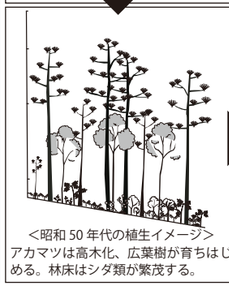
尾根には新たにアカマツが育つ　　今の自然を丁寧に見つめる




<薪炭林時代の植生イメージ>
高木は樹齢 60 年くらいまで、実生や樹齢 20 ～ 40 年のアカマツが中心。草木は日々伐採され広葉樹は少ない。


<昭和 50 年代の植生イメージ>
アカマツは高木化、広葉樹が育ちはじめる。林床はシダ類が繁茂する。


<令和 8 年の植生イメージ>
アカマツが高齢木となる。広葉樹も高木化。尾根にはアカマツ若齢木。


尾根で見られる、自然下種により群生するアカマツ若木

公園では 2006 年（平成18）3月「静岡県立森林公園（浜北地区）全体管理計画」が策定されその20年後、2026 年（令和 8）3月に改訂版が策定されました。公園開設時には薪炭林時代の手入れの影響が色濃く残るマツタケの産するアカマツ林が公園全域を占めていました。しかし人の伐採利用がなくなり自然を楽しむ憩いの場となると、次第にアカマツ林床に広葉樹が育ちはじめマツタケは見られなくなります。

最初の管理計画では、開設当初のようなアカマツ林を念頭に計画されました。しかしその後、薪炭林時代と同じような管理は現実的ではないことがわかりました。改訂版では、現地調査とドローン撮影による植生調査において園内全域でアカマツと広葉樹の混在が明らかになり、特に尾根沿いは自然下種によるアカマツ実生群落が確認されました。また暗い林床には菌従属栄養植物が見られ、菌類ではアカマツ林、広葉樹林、混交林のそれぞれに特有のキノコが発生するなど、現植生ならではの生態系となっていることが確認できました。

この公園の設立主旨は「保健休養の場および自然保護に対する理解を深めてもらう場」です。アカマツ林、混交林、照葉樹林のどの植生にもそれぞれに生態系があり、それらに優劣はありません。移り変わる自然の現状を丁寧に把握し、その生態系を理解することが森の管理を考える第一歩となります。



「目標とする森林区分図」
静岡県立森林公園（浜北地区）
全体管理計画書 2026 年（令和 8）3 月より
現況に即し、園内のほとんどが
「アカマツ広葉樹混交林」とされた

協力　池ヶ谷のり子氏（菌類）

参考文献・資料　「県立森林公園とマツタケ余話」松井吉良「Ｆ＆Ｆ」（(公社）静岡県林業会議所発行）掲載コラム、「麁玉村」地形図 大日本帝国陸地測量部 明治二十三年測図同二十五年製版、「濵名郡赤佐村誌」赤佐尋常小学校 (大正 2)、「遠江 四十五号一般社団法人 浜松史蹟調査顕彰会 18-19 頁松茸狩り、「浜北市史 通史上巻」浜北市長 森島宏光 発行、「浜北市史 通史 下巻」浜北市長 森島宏光 発行、「赤佐小学校百年の歩み」赤佐小学校 PTA、「静岡県の植物群落 - 静岡県の自然環境シリーズ -」近田文弘 著（第一法規）、「郷土 浜北のあゆみ」浜北市

ビジターセンター　バードピア浜北

自然情報の発信、自然体験プログラムなどを通じて、静岡県立森林公園の自然の魅力を発信しています。
■入館料：無料
■開館時間：9:00～16:30
■休館日：水曜（祝日の場合は翌日）と年末年始（12/29～1/3）

木工体験館

気軽に木工作を楽しむことができます。工具はそろっているので、手ぶらでお立ち寄りください。
■木工作：金・土・日
■開館時間：9:00～16:30　初回利用時に「初心者利用講習」受講が必要です。
■休館日：月・火・水と年末年始　（12/29～1/3）
■問合せ：☎ 053-583-1559

Shizuoka Pre.Forest Park　静岡県立森林公園季刊誌
ムササビだより
2026
春

静岡県立森林公園
〒434-0002 浜松市浜名区尾野 2597-7
☎053-583-0443　FAX 053-583-2700
http://kenritsu-shinrinkouen.jp/

静岡県立森林公園 今昔 6 アカマツ林から混交林へ

森林公園の開設前から今日にいたるまでの植生の変化を見てみましょう。この地はかつてマツタケ産地として知られるアカマツ林でした。しかし今、マツタケは見られなくなり、広葉樹とアカマツの混交林となりました。人の暮らし方の変化と植生遷移には大きく関わりがありそうです。

松茸料理も提供し、いたる処でゴザを敷き炭坑節や歌や踊りで賑わった

森林公園の変遷を見る上で、明治～大正14年 8 月までを「御料林時代」、大正14年9月～昭和40年3月までを「県営林時代」、昭和40年4月～現在までを「森林公園時代」と便宜的に呼ぶことにします。

さて小見出しは随分楽し気な描写がされています。これは県営林時代の園内を表した一節です。文章は、林業関係の機関紙「F&F」（昭和47年10月1日号 現公益社団法人 静岡県林業会議所発行）に掲載された1200字ほどの寄稿文からの引用です。当時、浜北市根堅生産森林組合長であった松井吉良氏によって書かれました（「県立森林公園とマツタケ余話」）。

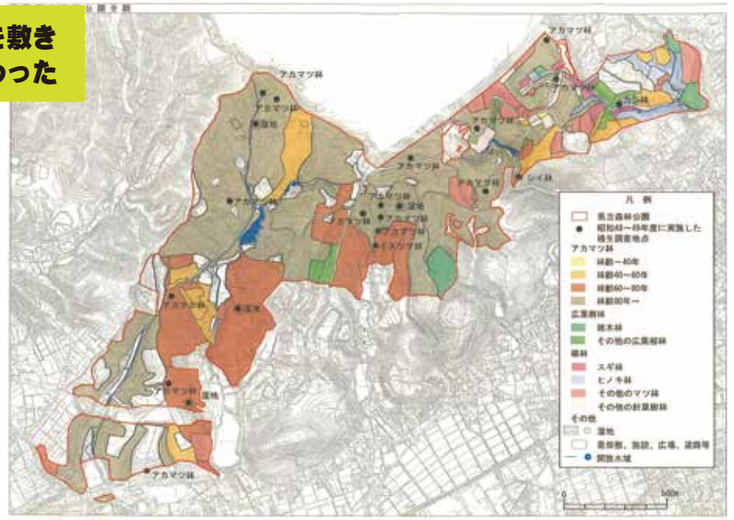
この寄稿文では、御料林時代の園内についても記され、当時の様子がわかる貴重な資料となっています。以下に引用します。

「森林公園の大部分は御料林で、短剣を腰にぶら下げた御料局の役人が大正の末期迄時折見えたことをよく子供心に記憶している」

「旧来の慣習を重んじ近隣農民に対し小柴下草を生活用としての薪炭又は肥料用として僅かな代償で之を払下げると共に反面又部落の自治組織を利用して火災盗伐の予防に役立たせた」

「松茸の発生を見る秋十月ともなれば住民は競って秘かに松茸狩を行い浜松市、二俣町方面に持ち運んだ」

「この競争が余りにも熾烈を極めたので各部落では一計を案じ即ち口ぜり競売制度を採った」
「落札者はその年秋一ヶ月半自己の権利として縄張りを行い多くの入山者に料金を取って松茸狩をさせた」



「浜北県営林施業図に基づく森林区分」静岡県立森林公園全体管理計画 2006 年（平成 18）3 月では園内のほとんどが林齢 80 年以上のアカマツ林となっています。逆算するとマツタケが沢山発生していた昭和 30 年代の林齢は 30 年となります。ちょうどアカマツにマツタケが発生する林齢です。

御料林時代、園内に役人が配置されていたこと、地域の人々が御料林の産物を利用できたこと、むしろ地域の人の利用が防災に役立てられたことなどがわかります。なによりマツタケが御料林時代から積極的に採取され活用されていたことが興味深いです。

また県営林となってからは松茸狩と称し大々的に宣伝ビラで告知、松茸料理も提供し、歌や踊りで秋の一大観光地となっていたことがわかります。これが戦前から公園の開設まで続いていたようです。また松茸で利益を得た部落は、自衛消防隊や祭典費などをまかなっていたこともあったようです。

寄稿文の最後は次の言葉で締めくくられています。

「松茸の威力はすでにこの時代より金であり霊験のあらたかなものである（中略）その松茸も今はすっかり姿を見せない。松茸の城は親子でも夫婦でも教えないとか」

松井氏の寄稿文から、地域活性化に一躍買うほど多くのマツタケが発生していたと解釈できます。しかし、公園開設から 7 年後の昭和47年にはもうマツタケの発生は見られないとも記されます。いったいなぜマツタケは出なくなったのでしょうか。

薪炭の暮らしがつくった マツタケ山

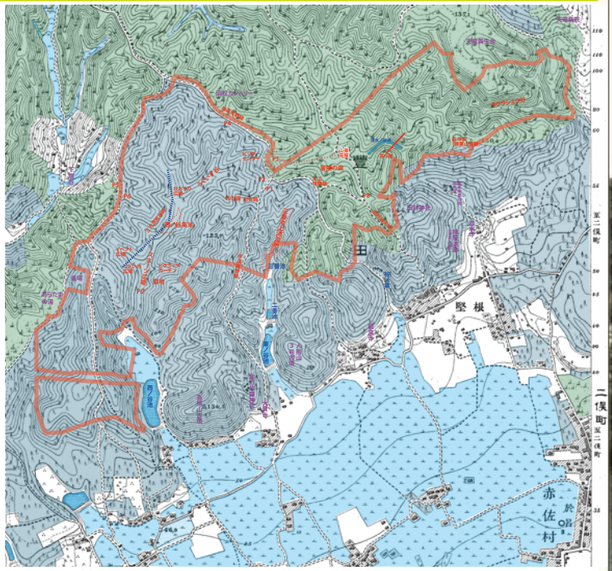
○　マツタケは、若めのアカマツ純林に発生する

マツタケとはどんな生態を持つキノコなのでしょうか。マツタケ（Tricholoma matsutake）は、担子菌類キシメジ科のキノコで、主にアカマツの根に共生する外生菌根菌です。マツから光合成でつくった糖をもらう代わりに、地中にのばした菌糸が吸収した水分、窒素やリンなどをマツに与えます。宿主樹木がないと生育できません。逆にアカマツが、裸地など酸性度の高い痩せ地でも生育できるのは、マツタケなどの外生菌根菌と共生する陽樹だからです。

マツタケは、水はけよく貧栄養な環境を好みます。落ち葉かきがされず、広葉樹などさまざまな植物が育ち腐植層が厚くなったアカマツ林では、微生物が増えて競争に負けてしまうようです。また、マツタケの子実体（キノコ）が最もよく発生するのは、樹齢が20～40年のマツといわれています。樹齢が若すぎても老齢でもマツタケの子実体は発生しにくいようです。

樹齢 20 年となると胸高直径は個体差はあれど 5 ～ 15 ㎝程度、樹高も 3 ～ 8m程度が多いように思います。40 年生ではもう少し太く高くなりますがそれでも胸高直径 15 ～ 30 ㎝ほど、樹高も 10 ～ 15m程度です。現在、園内で見られるアカマツ林は、樹齢は 100 年以上のものが多く胸高直径は 30 ～ 60 ㎝ほど、樹高も 25mほどの高木が多くを占めます。

松茸狩ができたころの風景は、今のアカマツ林と比較するなら、随分背丈が低くて細いアカマツが生え、広葉樹も少ない明るい山だったことでしょう。



「s 835 鹿玉村 1890 年（明 23）」（国土地理院）を彩色、加筆加工して作成

森林公園エリア　針葉樹　荒れ地　水田

静岡県西部は暖温帯の気候であり、自然に任せておくと植物はいずれシイやカシなどの照葉樹に置き換わっていくとされています。しかし当地はかつてマツタケ産地となるほどのアカマツ林が広がっていました。それはなぜでしょう。この土地が地質的に痩せ地であることに加え、たきぎなどとしての利用で、人々が日々草木の伐採をした為、植生遷移しなかったからというのが大きな理由と考えられます。明るい痩せ地に真っ先に生えるのがアカマツです。人の暮らし方がマツタケの生育環境を整えてきたと言えそうです。

マツタケ山　たきぎ山だったころ　【森林公園とその周辺でかつてマツタケが採れたことを示す資料の紹介】

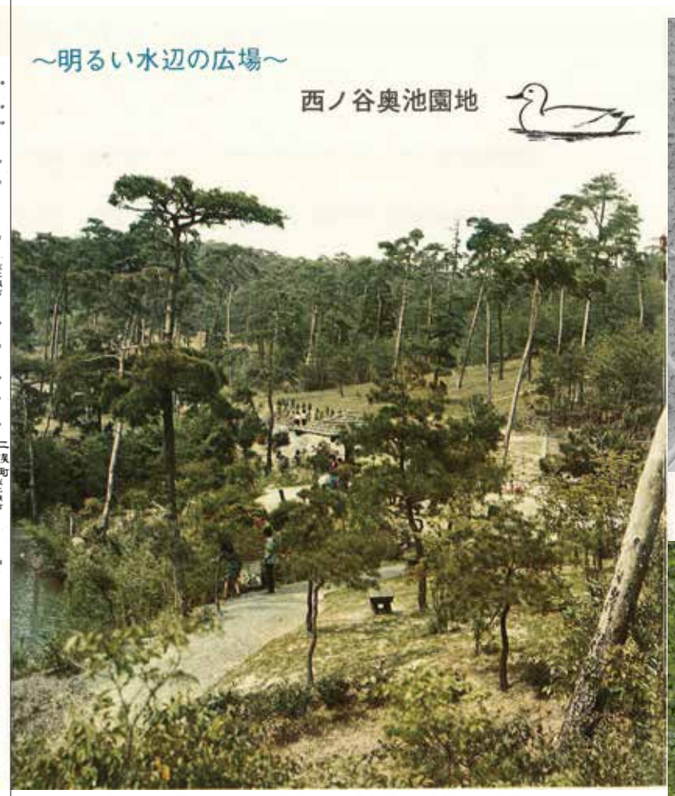
●「濵名郡赤佐村誌」（大正 2 年発行）には、 松茸が米や石灰と並んで主たる産物と記され、**「山林産物トシテハ松茸アリ年産千円以上ニ及ブ」**とあります。

●浜松市立中央図書館所蔵の「遠州電鉄及岩水遊園地　御案内」遠州電気鉄道株式會社（昭和 3 年頃発行）は蛇腹折りの観光案内パンフレット。片面が文章による解説、 片面は鳥観図となっており、 鳥観図は光明山、 秋葉山を背にした岩水寺を中心に、 南は弁天島、 遠くは御前崎、 箱根まで含めて美しく描かれています。この絵の岩水寺周り、つまり森林公園周辺には、 5 カ所に松茸の絵と**「松茸産地」**という文言が描かれます。 解説には**「岩水寺松茸山」**として**「遊園地裏山一帯は松茸の産□遠州第一の稱あり秋季茸狩の催は非常に盛況なり」**とあります。 遊園地（岩水寺）の裏山となるとちょうど森林公園です。

●「静岡県庶民写真館（静岡新聞社 平成 11 年 7 月 23 日発行）」125 p には撮影年と写真提供者が 「昭和 32、 浜北市・杉保君代さん」、 写真説明が**「マツタケ狩り」**とする写真が掲載されています。 そこには本号冒頭で紹介した松井氏の寄稿文にあったようにマツ林と思しき場所にゴザを敷いておひつに入れた食事を楽しもうとしている小さな子供連れの家族が写っています。森林公園かどうかは特定できませんが、 浜北在住の方が松茸狩を楽しむ画像は貴重な情報となります。

●「赤佐小学校百年の歩み」赤佐小学校 PTA（1975）には、県営林となってからの地域住民の利用について、 県は枯損木や松茸、 芝草など山の副産物を村民に払い下げていたと記されており、 県営林時代も地域住民がこの地を生活の場として使っていたことがわかります。 また現在ゴルフ場（浜松カントリークラブ）となっている場所は、 当時受留山の前山と呼ばれており、 その大部分が**「天然林（松）」**と記されています。 明治 37 年に**「松茸山・たきぎ山」**とすると決められたとあります。 明治 23 年測量地形図では荒れ地となっている場所です。 地図測量から 14 年後なので、 アカマツがちょうどマツタケの生える樹齢になっていたのかもしれません。

□は資料欠損により文字解読不明



西ノ谷奥池園地　1972 年（昭和 47）6 月発行「静岡県立森林公園」パンフレットより
右上空撮とほぼ同じ時期。園地整備された場所は当然下草等は少ない。
背景の高木はアカマツである。西ノ谷奥池の水辺も現在よりも奥まで水が見えている。

○　人々はどのくらい山の草木を使っていたのか

森林公園周辺は古くから人の営みがありました。隣接する石灰岩地からは「浜北人」が出土し、森の家が建つ勝栗山には縄文遺跡や古墳が確認され、奈良時代には岩水寺が創建されるなど。また公園周辺には瓦や茶わんを焼く窯跡が複数あります。寺院建設には木材や瓦など大量の資材が必要だったでしょう。また浜北市史には小柴下草を刈る場所を巡って、隣り村同士の争い仲裁に関する奉行所の記録がしばしば見られます。小柴下草を得る場所の確保は村の生命線だったのでしょう。明治44年の赤佐村人口は、3243人、585 戸（濵名郡赤佐村誌）」だそうです。「赤佐小学校百年の歩み」には地域住民は我先に山へ入り、年中、たきぎを採っていたと記されます。これだけの人数と戸数の生活を成り立たせるには、相当量の草木が日々消費されたと考えられます。

明治23年に測量された地形図で森林公園の範囲を見ると、現在、園内中央を南北方向に走る尾野線からみて東側は荒れ地マーク（グリーンで着色）、西側は針葉樹マーク（グレーで着色）となっています。森林公園範囲の外側も西と北は荒れ地マークがつづきます。針葉樹マークは、主にアカマツ林と考えられます。荒れ地マークのところは場所によって「はげ山」のような樹木の少ない裸地の目立つ草地のような所だったかもしれません。



「MCB-70-7X_C2_0005」1970 年（昭 45）5 月 22 日（国土地理院）を加筆加工して作成
西ノ谷奥池園地、水辺の広場は、うぐいす谷園地は、すでに整備されている
左の写真からもわかるとおり植生は高木はほぼ全域がアカマツである。



2025 年（令和 7）8 月ドローン撮影したものを合成（資料提供：静岡県西部農林事務所）
西ノ谷奥池周辺の木々はせり出し、土砂の堆積により北側は樹林化している。
西ノ谷線も樹林化し上空からは管理道が見えなくなるなど、園内全域広葉樹の
高木化が進む。ただしアカマツ（淡い黄緑色の樹木）も各所に見られる。

○　人の暮らし方の変化が植生を変える

現在、森林公園周辺にお住まいの80代90代の方々からは、子供の頃は毎日のようにゴカキをし、風呂は薪で、オクドサマ（カマド）でご飯を炊いたという声を聞きます。ゴカキとは落ち葉かきのこと。この方々が子供の時分というのは、昭和 20 ～ 30 年代、マツタケがよく採れた頃です。

マツタケが採れなくなるのは、昭和 40 年代以降、各家庭に電気・ガスの生活がやってきてからです。そうなると山でゴカキをすることもなければ、たきぎも採りません。草木はのびのびと育ち始めます。森林公園の植生がかわりはじめるのはこの頃から。また昭和 50 年代から全国的に広がったマツノザイセンチュウによる松枯れもアカマツの減少に拍車をかけました。

「静岡県立森林公園」開設から 60 年が経ち、驚くほど植生遷移が進みました。裸地など自然の植生遷移の初期に生育するとされるアカマツは、今では姿を消してしまったでしょうか。